2023 年 9 月 21 日

短期海外研究出張報告書

南山大学長
ロバート・キサラ　殿

所　属　　人文学部・人類文化学科

職氏名　　教授　渡部森哉

受入研究機関等：ペルー共和国カハマルカ県、リマ県（受入機関：ペルー・カトリック大学人文学部）
期間：2023 年 7 月 9 日~9 月 15 日
目的：テルレン＝ラ・ボンバ遺跡の発掘調査および出土遺物の整理

7 月 17 日から 9 月 10 日にかけてペルー共和国北部高地のカハマルカ県に位置するテルレン＝ラ・ボンバ遺跡の第三次発掘調査を実施した。同遺跡はアンデス山脈から太平洋に流れ込むヘケテペケ川中流域の標高約 600 メートルの場所に位置する。2019 年に第一次発掘調査、2022 年に第二次発掘調査を実施した。今年度は新たに採択された科学研究費補助金により、第三次発掘調査を実施した。

アンデスでは後 9－10 世紀にワリ帝国が台頭し、ペルー北部まで勢力範囲を拡大した。申請者は 2008 年から 2012 年にかけて北部高地のカハマルカ盆地に位置するエル・パラシオ遺跡の発掘調査を実施し、同遺跡がワリ帝国の行政センターであることを突き止めた。また、ペルー北部海岸ではサン・ホセ・デ・モロ遺跡、サンタ・ロサ・デ・プカラ遺跡でワリ文化の痕跡が発掘調査で見つかっている。ワリ帝国期の山地と海岸との間の関係を理解するためには、両者を繋ぐヘケテペケ川流域での調査が必要であった。

2009 年からの断続的な踏査の結果から、ヘケテペケ川中流域にはワリ帝国期の遺跡が複数分布することが判明した。また地表で確認できる土器は、全てがワリ帝国期のものであり、その前、あるいは後の時期の土器は確認できなかった。テルレン＝ラ・ボンバ遺跡はそのうちの 1 つであり、計 24 ヘクタールの広まりがある。

埋め戻しを含め計 8 週間の調査の結果、次のことが明らかとなった。

建築は少しずつ建て直されており、計 5 つの建築フェイズが設定できた。最終期には多くの墓が検出された。

装飾土器は、カハマルカ文化、海岸カハマルカ、シカン文化、チムー文化、ワリ文化のものが確認された。粗製土器は大きくカハマルカ計の土器と海岸系の土器に分類できる。

土器と同様に埋葬形態にも多様性が認められる。単純な墓坑、チュルバと呼ばれる塔状墳墓、複数のミイラを安置するための大型墓坑、地下式の竪穴墓、などが確認できた。地下式の大型竪穴墓は今回新たに 2 基確認されたが、いずれもその上にチュルパや部屋状構造が建設された。一基の墓室では内部に壁龕を伴っており、その内部で完形土器などが置かれていたものが発見された。いずれのデータも、ワリ帝国期ペルー北部で生じた変化を理解する上で重要である。

今回の発掘調査の様子については、地元の文化省カハマルカ支局がニュースを発信し、ペルー内外で報道された。

なお帰国前の 9 月 12 日には受入機関のペルー・カトリック大学人文学部考古学研究室の主催で同大学において対面で講演を行った。

以上